

ヒノキカワモグリガ被害木の 主幹材内における食痕分布

佐賀県林業試験場 竹下 晴彦
林業試験場九州支場 倉永善太郎

1. はじめに

佐賀県内におけるヒノキカワモグリガの分布と被害歴は、前報²⁾のとおりであり、今後これら被害木の材質劣化が懸念される。そこで、本害虫の主幹部における実害を究明する目的で、材内食痕の分布状況を調査し、若干の知見を得たので報告する。

2. 調査木と方法

上記の被害歴の中から次の3地点における被害木の全食痕について、地上高と食害年の関係を調査した。

佐賀県神埼郡三瀬村井手野	アヤスギ	28年生	
唐津市東山田	〃	26	〃
唐津郡太良町中山	〃	34	〃

3. 結果および考察

1) 調査木採集林分の概況

調査木の被害は、前報のとおり三瀬、太良が1970年頃より発生して、年次別被害量は漸増型であり、唐津は1976年の発生で激増型を示している。

2) 地上高別食痕密度 (図-1)

林内食痕の、地上高と食害年別分布状況は、地上に近い部位ほど、各食害年の食痕が多く蓄積されているが、食害部位の高さと食害年の関係については、近年の食痕が地上に近い部位に多くみられるものもあり、

麻生²⁾らの調査例と若干異なる結果が得られた。

3) 地上高別食痕密度 (表-1)

つぎに、主幹表面の単位面積当りの食痕数を調査当年の食害について検討した。すなわち、各調査木の地上高9mまでの各部位の平均値は三瀬0.19~0.37, 唐津0.05~0.25, 太良0.08~0.39で林分間に被害量の差異がみられる。しかし、調査林分ごとの各部位における100cm²当り平均食痕数は、その最大値が地上高に関係なく分布し、最小値についても同様のことが言える。

4. むすび

以上を総合すると、主幹部の食痕分布は既報¹⁾の調査例を除き、小径木の場合は今回の調査結果にみられるように、歴年、地上高とは無関係に食害することが判明した。しかも、これら食痕は地上部に近い位置ほど、多く埋設されており、この被害が継続されると、その食痕数は全主幹部に更に増加されることになり、佐賀県の伐期令(35年)を勘案すると、収穫時の材にも大きな影響を生じることが予想される。

引用文献

- (1) 麻生賢一ら：日林九支研論 36, 211~212, 1983
- (2) _____ら：_____ 37, 197~198, 1985
- (3) _____ら：_____ 38, 215~216, 1985

表-1 主幹部における調査当年(1983年)の食害痕数 (2本平均)

林分	地上高 項目	0 ~	1 ~	2 ~	3 ~	4 ~	5 ~	6 ~	7 ~	8 ~	9 ~
		1 m	2 m	3 m	4 m	5 m	6 m	7 m	8 m	9 m	10 m
三瀬	実数	14.5	8.0	8.0	11.5	12.5	8.5	8.0	7.0	4.0	3.0
	100 cm ² 当り	0.31	0.19	0.20	0.32	0.37	0.29	0.31	0.33	0.25	0.32
唐津	実数	5.5	3.0	2.5	8.0	4.5	4.5	4.5	1.0	1.5	1.0
	100 cm ² 当り	0.13	0.08	0.07	0.25	0.14	0.16	0.15	0.05	0.10	0.11
太良	実数	18.9	6.0	5.5	5.0	6.0	6.0	1.5	1.0	0.5	
	100 cm ² 当り	0.39	0.20	0.21	0.21	0.27	0.32	0.09	0.11	0.08	

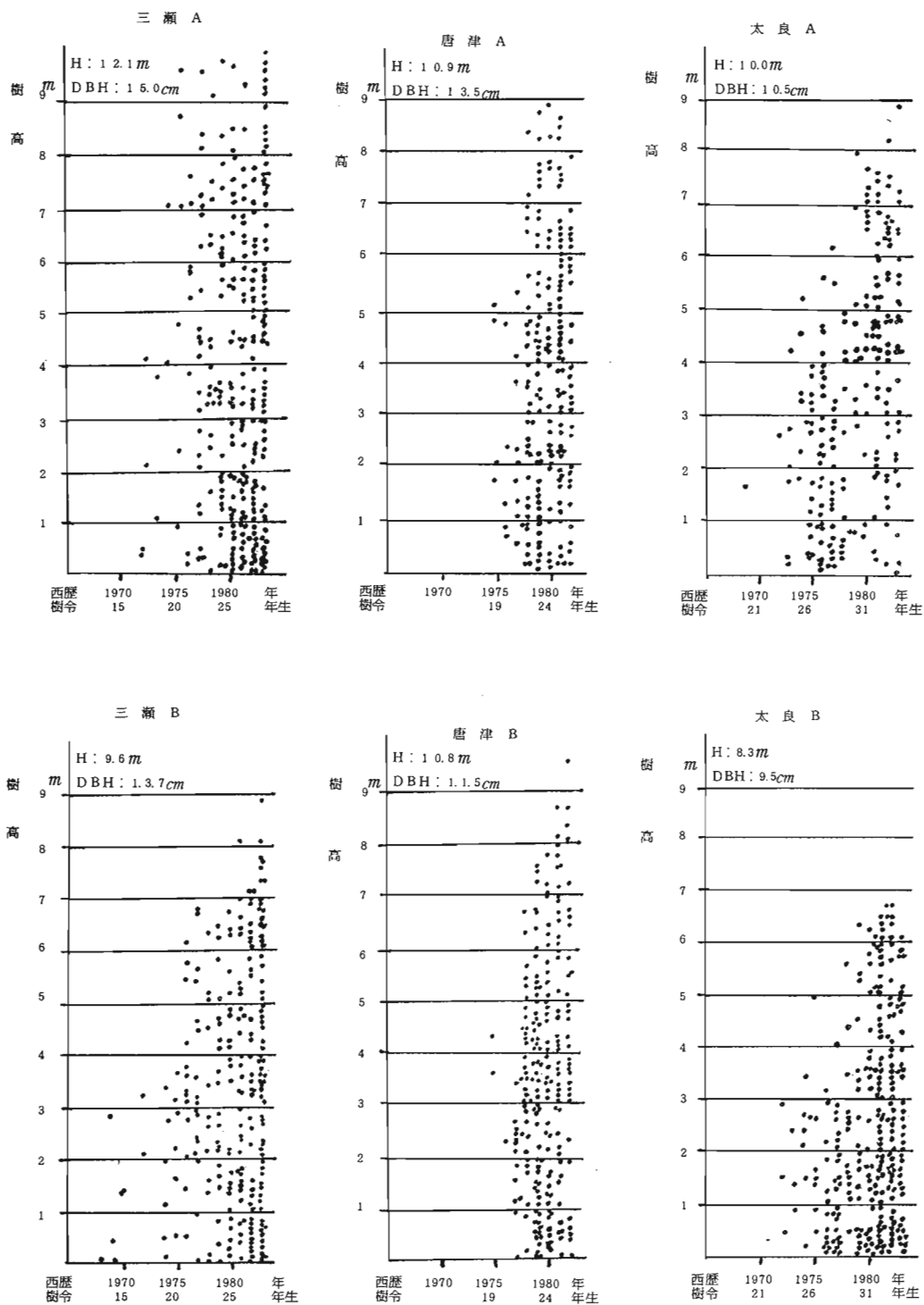


図-1 材内におけるヒノキカワモグリ食痕分布